

【連載】

コタツキーが行く！

まだまだ伸びる！注目の介護事業所探訪

第22回 介護専門の協同組合を設立、徹底した「教育」で質の高い人材を育成——のぞみグループ



アグリマス株代表取締役 小瀧歩



のぞみグループ代表 甘利 庸子氏

うかがえます。

小瀧●なるほど、そうした環境のなかでこちらの組合が順調に拡大を遂げられている理由はどこにあるのでしょうか。

甘利●当たり前のことですが、一番大事になってくるのは「教育」です。当組合では、集団講習のなかで介護職員初任者研修をしっかりと行なっています。

幸いにも当組合はインドネシアから最初に介護人材を受け入れましたので、EPA3カ国（フィリピン、ベトナム、インドネシア）での知名度も高く、わたしどもの組合が面接をしたいといえ、優れた人材が集まってきてくれます。

特にインドネシアは1期生から6期生まで入ってきていますので、彼らが当組合について口コミ、SNSなどで自ら情報発信してくれます。フィリピンでもケアギバーの資格をもったN4合格者がうちの面接を待っていてくれます。

一方、ベトナムに関してはかなり人材も枯渇してきていて、特に看護師は相当高い給料を支払わないと集まりません。そこで当組合では、有資格者以外の学生

1993年の「のぞみ薬局」を皮切りに、以降、社会福祉法人のぞみ福祉会、医療法人清秀会など9法人をグループ化、

介護事業でも有料老人ホームなど長野県小諸市を中心に展開するのぞみグループ。その代表甘利庸子氏は、2015年に

「介護施設協同組合」を設立。介護施設だけを組合員とし、介護技能実習生達が日本で得た知識や技術を将来の東南アジアの高齢化社会で活かせるように、ベトナムやインドネシアなどからの入管申請

を含め、受入れのサポートや介護施設と介護技能実習生候補者とのマッチング、受入れ実習施設への配属後の支援など、監理団体としての活動に取り組まれています。その実際について伺いました。

教育を徹底し 質の高い人材を育成

小瀧●甘利代表が外国人の介護人材に着目されるようになったきっかけは。

甘利●私は元々薬剤師で薬局経営から介護事業に参入しました。薬局業界では薬剤師の人材不足が大きな問題で、その後経営していた薬局を手放すことにもなったのですが、これは将来介護業界においても同じ状況が起きるだろう、その結果資本力のある大きなところしか生き残れず、小さなところは破綻もしくは大手に併合されていく道しかないだろうと考えました。

しかし、人口が縮減するなか日本人だけで介護事業をまかなうという発想では立ち行かなくなると考え、外国人材の技能実習生の受け入れ事業をはじめようと思つたのです。

小瀧●そこで海外からの人材の受入れのための管理団体として「介護施設協同組合」を立ち上げられたわけですね。現在の状況は。

甘利●設立以来、わたしどもの組合は全国規模で広がってきており、現在56法人

が参加しています。今後、九州からの参加にも対応する予定で、介護専門の組合としては日本で最大ではないでしょうか。すでに99人の介護技能実習生が入国して、今年度末までには合わせて200人以上が入ってくる予定です。

小瀧●組合を運営するうえでご苦労される点というのは。

甘利●一般的に組合運営には大変に厳しいものがあり、最初の1年間は売上げが立ちません。その期間に海外に何度も出向いて送り出し機関と調整しながら面接を行ったり、書類作成や、入管対応の事務コストも含めて結構なお金がかかってきます。

そして3年以内に債務超過を解消できない場合には、組合は更新ができないというとてもシビアな制度なのです。ましてや現在、海外ではすでに人材の取り合いがはじまっているので、そう簡単には優秀な材も集まってこないという状況が



グループではさまざまな高齢者介護施設（左）のほかに、施設日設「スミサピア」など（下）のさまざまな地域資源を活かした客施設も展開



たちに教育を行なって力をつけてもらうことに取り組んでいます。それと並行してベトナム国内での介護の環境も底上げしておいてあげれば、彼らが自国に戻った後にも施設や学校で活躍することができ、また将来的にはそこから人材が日本にやってきてくれる、そうした循環の形ができれば人材不足には困らなくなるものと考えています。

こうした人材を循環させる仕組みをつくるためにも、やはり重要になってくるのが教育なのです。わたしどもでは全国各地からでも共通の質の高い教育を受けられる仕組みづくりを目指していて、内閣官房のアジア健康構想協議会において当組合に求められている役割もそこだと思っています。今後、こうした循環の仕組みをベトナム以外でも、フィリピン、インドネシアで展開していく考えです。

実習生が自ら 渡航先の組合を選ぶ時代に

小瀧●実際に海外からの介護人材を受け入れてみて、いかがでしょうか。

甘利●わたしどもの法人では複数の介護施設を展開していることから、そちらで外国人材を受け入れていくことで、既存のスタッフの意識も変わりましたし、ご利用者様にも彼ら彼女らの笑顔が伝染していくのです。最初はもちろん苦しいことも沢山ありますが、いち早く一歩踏み出すところが、最後にはさまざまな恩恵を受けて生き残っていくのだと思っています。

今はまだ海外からの候補者を選ぶことができませんが、いずれは彼らが渡航先の国や企業を自ら選ぶことになるのは間違いありません。実際、昨年まではこちらからしっかりと人材を選ぶことができていましたが、今年に入ると自国の送り出し機関を飛び越えて、受け入れ先の国の組合を直接選ぶようになってきました。ですから介護専門で活動しているわたしどもの組合には、今、本当に多くの人が集まってきており、特にベトナム、インドネシアでは1期生、2期生と継続して入ってきていて、N4合格した人が40人も待っている状況です。

一方で、賃金もどんどん高騰して来ていますので、東京はまだしも地方は本当

に厳しくなってきましたが、それでも当組合では希望する会社があれば、面接はいつでも可能な状況になっています。

小瀧●教育が重要とのことですが、どのような形でなされているのでしょうか。

甘利●送り出し機関からの依頼を受けて、現地での介護導入教育を行なっています。そのため国内での研修期間で2カ月が経った段階では介護業務もできますし、記録も漢字やひらがなで全部書けます。

介護の教師として3人、日本語教師も3人が常勤であり、毎日日本語で日記をつけさせ、それを添削して戻すという形で教育をしていますので、それも当然かと思えますが、また実習生の1号から2号に上がる前に初級試験を受けなくてはなりません。事前に模擬試験を行ないこれに100%合格してからでないと思えませんので、施設に行ってから1カ月もすれば排せ介助まで、1年も経てば夜勤含めて即戦力として立派に活躍してくれています。「技能実習生は素晴らしい」「日本の介護の希望だ」ということを現場のスタッフに理解してもらうためにも、こうしたしっかりと教育が必要だと考えています。

一方では他の組合から受け入れた介護施設ではうまくいっていないところも出てきており、そこはいったんリセットをして、こうした技能実習生をうちで再教育をさせてもらうことも含め、他の組合

の組合員さんの駆け込み寺のような相談を受ける状況にもなっています。こうした対応も含め、この事業にはこれからも緊張感をもって取り組んでいきたいと考えています。

コタツキー、かく考えり

介護業界においては、介護保険の財源不足もそうですが、やはり現場においては人材不足が大変に悩ましい。そんななかではじまった技能実習制度、協同組合において、教育や運営に関するクオリティが求められてきているのは言うまでもありません。実際には海外、日本の両方でその仕組みを構築していくのは並大抵のことではないと思いますが、それが並々ならぬエネルギーで突き進んでいるのが甘利代表です。介護専門で日本最大、クオリティも日本一の組合を目指して頑張っていたきたいと思います。

小瀧 歩（こたき・あゆむ）

アグリマス(株)代表取締役
税理士 神道自然流空手初段

1967年生まれ 早稲田大学商学部卒。不動産、生保、大手監査法人を経て2003年新興市場ヘラクレスの立ち上げに参画。弥生(株)執行役員の後、独立。10年、アグリマス株式会社設立。東京・大田区にて「日本一食事にこだわる」デイサービスを開設。「産直八百屋」「ヨガ」とともに介護予防プログラムの「健幸TV」運営。

2016年厚生労働省「保険外サービスガイドブック」掲載。2017年経済産業省「健康寿命延伸産業創出推進事業」採択。2018年(社)日本健康食育協会「健康食育アワード・大賞」。